上川井だより　１月号

令和６年１月９日
横浜市立上川井小学校
校長　　山崎　真紀子

新春の凛と張り詰めた空気に身の引き締まる思いがします。今年は、能登半島における大地震という大変な幕開けとなりました。親族が集い年の初めを祝うというときに大規模災害が起きるとは、被災地の方の気持ちを思うと言葉もありません。未だ行方の分からない方も大勢いるようです。被災された方々に心よりお見舞い申し上げますとともに、何よりも、一日も早い復興をお祈りいたします。

＊＊＊・・・＊＊＊

グローブに添えられた小さな気配り

今月､メジャーリーガーの大谷翔平選手から日本の子どもたちに向けて贈られたグローブが、本校にも届く予定です。子どもたちが野球に触れ、興味をもつきっかけになってほしいという思いが込められているそうです。グローブは、１校に３つずつ届きます。３つというのは、なぜなのかなと思いましたが、２つが右手用でもう１つは左手用だそうです。そんなところに、大谷選手の細やかな心遣いを感じます。

わたしたちは、何かをしたい、また、成し遂げたいと思ったとき、自分の目的ばかりに目を奪われてしまいがちです。でも、目の前ばかりを見ていたら、気付かぬことも多いものです。視点を変えてみる、立場の違う人のことを考える、日頃子どもたちに言い聞かせていますが、なかなかどうして、大人であっても実際には、難しいものです。もしかしたら、困ることはないだろうか、悲しい思いをする人はいないだろうかと、気配りすることによって、同じことがもたらす結果は大きく変わってきます。今回のプレゼントでそんなことを教わったように思います。

被災地支援においても同様のことが言えるようです。贈る側としては、復興への気持ちを込めて作った千羽鶴、励まそうとした音楽祭、何かの役に立てばと集めた衣類、そうした支援がこれまでの被災地では重荷であったと報じられていました。また、人手が足りないのではないかとボランティアで駆け付けたくなりますが、ただでさえ倒壊した建物でふさがれた道路が渋滞し、緊急車両が行く手を阻まれるようなこともあるようです。立場の違う相手を思いやることの難しさを感じます。

12 月の人権週間でも、子どもたちは体験を通して、立場の違う人への気配りや言葉を使って分かりやすく伝えることの大切さを学びました。自分に見えているものが相手にも同じように見えているとは限らないこと、当たり前だと思っている生活の中にも、困りごとや心配を抱えている人がいるかもしれないことを知り、立場の違う人を気遣う優しさが必要であることを学びました。また、言葉を使って分かりやすく伝えることで大きな安心感につながることにも気付いていました。上川井小の子どもたちがさまざまな立場の人とふれあい、チャレンジする中で、多角的な視点を養い、互いの小さな気配りで誰もが安心して過ごせる生活を築いていってほしいと願っています。

保護者の皆様、地域の皆様、日頃より、本校の教育活動にご理解・ご協力をいただきありがとうございます。上川井の地域の皆様の一年が穏やかで安心できる日々でありますよう祈念致しております。どうぞ今年も変わらぬご支援をよろしくお願いいたします。